

2011 年アロアシャ教育プロジェクト調査報告書

(調査員:加藤清輝 報告日:2011/10/01)

(1) バングラデシュの教育制度とアロアシャ学園の位置付け

- ① バングラデシュの教育制度は、宗主国だったイギリスの影響を強く受けている。1年生から5年生までが日本での小学校に該当する「初等教育(Primary Education)」、6年生から8年生までが「前期中等教育(Junior Secondary Education)」、9年生から10年生までが「中期中等教育(Secondary Education)」で、この6年生から10年生までは日本の中学校に該当する。11年生から12年生は「後期中等教育(Higher Secondary Education)」で日本の高校である。つまりは、5-5-2年制の教育制度になっている。
- ② 義務教育は昨年2010年まで初等教育だけだったが、これに前期中等教育を加えた8年生までを義務教育とする「無料義務教育法」が2010年5月に成立し、国民皆教育への体制が法的に整った。これには、現在国民の約半数と言われる文盲人口を2015年までに非識字率ゼロにするMDGs(Millennium Development Goals:国連の掲げるミレニアム開発目標)が強く作用している。
- ③ 小学校から中学校はストレートで進学できるが、中学校終了時に「SSC(Secondary School Certification)」、高校終了時に「HSC(Higher Secondary Certification)」という全国で行われる卒業試験に合格しなければ、対応するレベルの学業を修めたとみなされない。つまりは希望する上級学校への進学がかなわない。
- ④ イギリスの植民地時代の教育は、イギリスによるインド間接統治のための一つの手段であった。教育を施すのは、現地人の上層階級だけに絞り、英語を始めイギリスの思想を徹底的に教え込んだ。そして教育を受けた上層階級の現地人を、イギリス人から現地人全体への意思伝達の窓口としたのである。このような方式を「下方濾過システム(Filtering System)」と呼ぶ。この制度のため、イギリスからの独立以来64年が経過した今でもバングラデシュでの階級の違いによる教育格差は大きい。これが、なかなか貧困が解消しない大きな要因の1つとされている。
- ⑤ バングラデシュにはこの他に「非正規教育(Non-Formal Education)」と呼ばれる教育セクターがある。主に「識字教育」がその目的であり、対象者は社会の底辺にいる貧困家庭の子供たちで、この教育セクターを担っているのが多くのNGOである。
- ⑥ アロアシャ学園はこの非正規教育セクターの1つとして1995年にスタートした。学園のフレーズを"School that dedicated for education underprivileged children(恵まれない子供たちのための学校)"とし、家庭が貧困であること、子供の勉学意欲が高いこと、親の理解があるこ

との3つを入学条件とした。

- ⑦ 1995年の学園設立当初は初等教育課程として、国語(ベンガル)、算数のいわゆる「読み書きそろばん」に、英語と社会、道徳、それに技能訓練の技術家庭を加えた6教科でスタートし、標準制度より1年短い4年制とした。これは子供たちを1年でも早く家計の稼ぎ手として期待する親の事情を考慮するものであった。2005年には中等教育課程の強い要望に応えるためこれを創設し、これも1年短い9年制とした。2009年には更に上級学校への進学を希望する生徒が多かったことから、SSC受験資格がある10年制へと移行し、非正規教育セクターとしての位置付けから、正式にバングラデシュの教育制度に則った「私立学校(Private School)」となっている。
- ⑧ 非正規教育セクターから私立学校への移行にあたっては、現地法人理事会では時間をかけて検討を行った。私立学校になることによって、入学のための3条件(貧困家庭、勉学意識、親の理解)や教育方針といった学園ポリシーに制約を受けるのではないかと懸念されたからである。結果、私立学校になっても政府の教育政策に対してある程度自由度を持って対応できること、従来の学園ポリシーを維持できることがわかった。
- ⑨ アロアシャ学園の2011年9月時点で在校生数は330人である。また、入学希望者の倍率は毎年10倍を超えている。このため私立学校となった2009年から入学定員を30人から50人に増員した。また、学業成績も毎年行われる全国統一試験ではラッシャヒ市の小中学校の中でトップになっており、中でも優秀な生徒数名は全国表彰されている。
- ⑩ アロアシャ学園の運営資金は、設立当初は日本からの援助金を中心であったが、経済的自立を目的として2001年に始めた農業技術支援プロジェクトによる農産物の販売収益で、数年前からようやく学園運営費および教育開発準備金を賄えるまでになった。また、私立学校になったことにより政府から教科書の配布と教師給料の一部補助金を受けている。よって、現在は学園運営のための資金に日本からの援助金は含まれておらず、持続可能な独立運営体制となっている。
- ⑪ 日本の有志による援助金は「アロアシャ子供基金」として高校進学のための奨学金として活用しており、現在5人の奨学生がいる。

(2) 就学、進学、就職状況とその課題

- ① 世界銀行統計によれば、パキスタンから独立直前の1970年のバングラデシュの成人非識字率は76%、アロアシャ学園が開校した1995年は62%、直近データでは53%まで改善されている。これには、非正規教育セクターとして取り組んだNGOの功績が大きいとされている。
- ② 男女別に見ると、成人非識字率の差は1970年から直近まで常に20ポイント近くあり、女子の

教育が進んでいないことがうかがえる。これには、イスラム教の影響が強く反映されているといわれているが、それでも昨年 5 月に成立した「無料義務教育法」ではイスラム教中心の国家としては初めての非宗教的教育制度となっている。今後男女間の教育水準の差は縮んでくるものと予測される。

- ③ バングラデシュの初等教育就学率は、1970 年で 54%であったものが 1995 年以降は 95%以上で推移している。男女比では 1970 年で 2:1、1995 年以降は 1:1 である。
- ④ 初等教育卒業率は、1970 年では 20%以下であったものが、1995 年以降は 60%以上まで改善されている。しかしながら、未だ 40%程度の子供たちは 5 年間の初等教育課程を修了することができず中途退学 (drop out)しているのが実態である。
- ⑤ 中等教育については、初等教育課程を修了した 60%の生徒の殆どが前期中等課程に進学しているが、その後中期中等課程には 40%、後期中等課程への進学率は 20%弱である。
- ⑥ 一方、アロアシャ学園の場合は、初等教育卒業率は 94%であり、中等教育卒業率も 88%と、バングラデシュの全国平均と比べると 40 ポイント以上高い。しかしながら、上級学校の後期中等課程 (高校) への進学率は 53%であり、これも全国平均と比べると 30 ポイント以上高いが、それでも 35%の生徒は進学を断念している。
- ⑦ 進学を断念した卒業生で消息がとれた約 40 人に集まってもらいヒアリングを行った。進学断念の理由は、経済的負担や親の同意が得られないなどの家庭の事情によるものが大半であった。また、卒業後の仕事を確認したところ、中等教育課程で学んだ知識を活かせる事務系の定職に付いている卒業生は男子で 2 割、女子で 1 割程度であった。男子の 8 割は日雇いの肉体労働やリキシャ運転手の仕事で家計を賄っており、女子の 9 割はメイド (家政婦) や裁縫などの内職で生計を立てていた。女子は卒業後の 16 歳頃で結婚する者もいるが、彼女らとコンタクトを取るのには難しく、今回の調査でその状況と正確な数字を出すことはかなわなかった。
- ⑧ バングラデシュの失業率は 40%を超えているとされ、最高学歴の大学卒業生でさえ就職難で喘いでいるというのが実態である。ましてや、日本でいえば中卒レベルの子供たちにその能力が最大限に活かされる就業の場が確保されるという保証はない。貧困家庭からの経済的自立のために、子供たちへの「教育」という理念で始めたアロアシャ・プロジェクトではあるが、優秀な子供たちの能力が活かされていない、就業機会の創出という、新しい段階での課題に直面した。

(3) 職業教育の必要性

- ① アロアシャ学園卒業生に加えて、彼らの親や地域住民を交えて、アロアシャ学園の運営についてディスカッションを行った。学園の教育方針、教育内容、教育の質については最高の賞賛

を受けた。とかく NGO 運営の私立学校の教育の質(教師の資質)にはばらつきがあり、これはバングラデシュの教育政策でも問題化されているが、アロアシャ学園は中途退学者が少なく平均成績もラッシャヒ市ではトップクラスで、経営的にも安定していることから教育の質には定評があるということであった。

- ② 一方で、卒業生の親からは、初等教育課程、中等教育課程だけでは就業機会に制約があり、授業料無料の上級学校(後期中等課程＝高校)での高学歴や職業教育課程での即戦力ある人材の育成の整備を所望された。卒業生も同様の意見であった。
- ③ ラッシャヒ県には中学校が約 4,800 校あり、高校は約 430 校、職業訓練機関は約 340 校である。この数字を見るかぎりでは、進学率が低い原因には家庭の事情だけでなく、受け入れ態勢が不十分であることが想定される。これは上記②での意見に共通するものがある。
- ④ これらを受け、アロアシャ学園教師、および現地法人理事会とディスカッションを行った。学園教師からは、生徒の勉学意識が高く更に才能を活かせる後期中等課程＝高校の新設を提案された。教師たちも教育の質を高めるための研鑽を積んでおり、生徒たちに対する期待は大きいものであった。一方、理事会からは、後期中等課程と職業教育課程のどちらも重要であるが、アロアシャのポリシー(貧困からの脱却)と緊急度を考えた場合、職業教育課程のほうが優先するのではないかと意見が出された。意見交換を重ねた結果、アロアシャ・プロジェクトの次の開発ステップとしては職業教育課程の整備を行い、後期中等課程については MDGs(ミレニウム開発目標)前年の 2014 年再度調査を行い検討することとした。
- ⑤ 加えて、将来的には当法人で取り組んでいる「農業」と「新エネルギー」分野の事業拡大による、アロアシャ学園卒業生の雇用の確保に努めるとした。

(4) 行政機関、地域住民の反応

- ① 1995 年のアロアシャ・プロジェクト発足当初から、ラッシャヒ市内にある政府研究機関、行政機関とは良好な関係を保ってきている。特に現ラッシャヒ市長(AHM Khairuzzaman Liton)は、アロアシャ・プロジェクトの良き理解者であり、2009 年の私立学校への移行の際も、市長の助言は大きな励みになった。また、アロアシャ学園に職業教育課程や後期中等課程を創設したいという計画についても、その必要性を理解し協力を約束してくれた。
- ② 上記(3)-①に記載したとおり、地域住民からはアロアシャ学園の教育の質について高評価を受けている。